

令和5年度第1回北海道立函館美術館協議会会議録

- 1 日 時 令和5年8月30日(水) 10:00~11:30
- 2 会 場 北海道立函館美術館 講堂
- 3 出席委員 仲井会長、元木副会長、今村委員、大瀧委員、熊木委員、武井委員、
梨木委員、鶴野委員
(欠席委員：石岡委員、川村委員、桜花委員、吉田委員)
- 4 傍聴者 なし
- 5 議 事

(1) 報告事項

ア 令和4年度事業実施状況について

事務局：資料1「令和4年度事業実施状況書」に基づき説明。

委員：昨年度は秋口あたりからコロナの状況が収まり、五稜郭界隈の観光客も多くなったと聞いているが、美術館はどうであったか。

事務局：10月に「金子鷗亭と中野北溟」展を開催したが、その頃から行動制限の緩和や旅行支援事業が始まり、観光客も多く見かけるようになって、当館の利用者を含め人の流れが活発になってきたと感じている。

委員：教員対象の鑑賞研修の参加人数が少ないと感じている。先生方も忙しいとは思いますが、この事業はどのように学校に周知しているのか。

事務局：教員のための鑑賞研修は、チラシを作成し、函館市内及び渡島管内、檜山管内の小中学校、道立学校などに周知している。コロナの影響もあるが、開催が土曜日の午前中であったため、学校行事や部活動と重なり、参加人数が伸びなかった。日程の工夫が必要と感じている。

委員：もっと多くの先生方に勉強していただき、子どもたちに紹介してもらえば、作品に触れる機会や美術館に足を運ぶことに繋がると思っている。日程は、土曜日の午前中以外に設定すること難しいのか。

事務局：昨年度は年間通してそのような日程で組んでしまったが、今年度は冬休みの研修が残っているため、日程の工夫ができたかと思っている。

委員：学校の先生方はこの研修を承知しており、美術館で鑑賞の勉強ができ、展覧会も見せていただけるということで、コロナ前は積極的に参加していた。昨年度とその前年は、やはりコロナの影響が大きかったと思う。長期休業中の指導者研修も、美術関係の先生方で情報を共有しており、コロナ前は一定程度参加していた。学校がコロナに神経質になっていたことも、参加者数の少なさの要因と思う。

委員：資料の作り方についてだが、事業別にこのような形の資料を作らなければならないのかとも思うが、例えば、展覧会に関連する活動と単独の活動に分けるなど、事業の全貌がわかるような作りであればよいと思う。一つの展覧会で鑑賞研修や他の事業を行う中で、合わせて何か開催できないかなどの見直しをするため、資料の作り方を工夫してみてもいいだろうか。項目も、開催日のほ

か、時間なども入るとわかりやすく、見直すきっかけになると思う。

イ 令和4年度道立美術館評価に係る評価結果について

事務局：資料2「令和4年度道立美術館評価に係る評価結果」に基づき説明。

委員：基本的運営方針Aの対応で、所蔵作品の他館への貸出件数がなかったということだが、コロナの影響もあると思うが、コロナ前と今年度、今後の見込みで貸出はどういう状況になっているのか教えていただきたい。

事務局：他館への作品貸出については、基本は相手方からの申出によるため、当館のこの作品を貸して欲しいという要望があれば、対応を検討することになる。令和4年度はそういった申出がなく、貸出がなかった状況である。コロナ前も貸出はあり、今年度もすでに貸出を行っているので、その年によって違う。

委員：指標値の設定の仕方は、前年度実績に基づく決まりなのか、それとも「今年はこの数値をめざそう」という形で立てるのか、それぞれの道立館でバラバラになるかと思うが、指標値の作り方を教えていただきたい。

事務局：評価の指標値については、それぞれの道立館で設定している。今回お示した令和4年度の評価の指標値は、当館では過去5年の平均値を採用している。ただ、コロナの影響もあり、過去5年の平均値が必ずしもふさわしくないのではないかと検討する中で、令和5年度の指標値を立てる際は、過去5年の最高値を取っている。他の道立館もそれぞれで指標値を設定しているが、過去5年の最高値を採用しているケースが多い。

委員：評価指標に定量評価と定性評価があり、恐らく今の時点では定性評価のものには斜線が引いてあり、取組状況が記載してあると思うが、この部分について、今後、斜線ではなく目標をどう表すかについて検討したりするのか。

事務局：この資料の評価は、今年度限りの様式であるが、この項目は数字で表す、この項目は取組内容で評価する、というように全道共通で同一のものであり、当館で独自に決めたものではない。令和5年度からの評価は内容を改正しているが、改正前に全道立館に対して、この評価指標を数字で示せるか否かの調査を行っており、その結果を元に新しい評価制度がスタートしている。次回の協議会からは、新しい評価の様式で報告することになる。全道的に検討を重ねて決定した評価の仕方、目標の立て方になっている。

委員：評価は非常に難しく、数字で表せることだけで美術館の評価はできないと思うので、大変だとは思いますが、あまり詳しくない方でもこういう風に見て評価できるんだなど、わかるようになっていけばいいと思う。

(2) 協議事項

令和5年度運営計画について

事務局：資料3「令和5年度運営計画書」に基づき説明。

委員：大学とのキャンパスパートナーシップ制度について、大学から申出があれば受けれてもらえるものなのか。

事務局：大学から申出をいただき、料金を払っていただいて実施する形になるが、大

学の予算がつかなくなり、復活が難しい状況となっている。全道的な課題でもあるため、こういった取組が可能か、料金の見直しなどを含め来年度に向けて教育庁として検討を行っている段階である。

委員： 2月の協議会の時に、「美術館にまだ1回も足を運んだことがない方がいるので、今年度の山本二三展の時からでも、たくさん宣伝をして、美術館に足を運んでくれる方が多くなるといい」と話をした。山本二三展では新聞に何度も宣伝されて、カラーでも掲載され素晴らしいと思った。観覧者数と宣伝費用の収支はどのような状況なのか。

事務局： 山本二三展については、当館と北海道新聞社、函館市教育委員会の3つの団体が主催して開催した。具体的な収支の話はできないが、今回、北海道新聞に毎週のように広告を出していただいたこともあり、入場者数も好調で、効果があった。

委員： 山本二三展では修学旅行生が多く来館していたと聞いている。五稜郭タワーから流れてくる人も多いと思う。美術館の前に展覧会の告知看板があって、いいなと思って見ているが、後ろを見ると地図もあって美術館まで140メートルとあるが、美術館はこちらという矢印だけなので、告知看板にも、140メートル、徒歩2分などと具体的な表示を出すによりよいと思う。

委員： ボランティアのいちいの会との共同に負っている部分があると思うが、いちいの会は美術館とは別団体になるのか。

事務局： 美術館職員ではなく、ボランティア団体であり、開館当時から美術館の運営に協力いただいている。

委員： 私は物販でしかお会いしていないが、新しい方が美術館と関わりたいと考えた場合、その方法は、いちいの会に入るしかないのだろうか。関わり方のルートが見えにくいと思う。観光で来られた方も、売店や喫茶をちょっと覗いてみて、そして展示を見てみようかとなる場合もあると思う。運営される場所がずっと決まっている形の中で、新しいアイデアを出す仕組みができていいのか気になった。

事務局： いちいの会と美術館は開館以来、両輪で歩んできた。売店、喫茶のほか、新聞の切り抜きの整理や表で見えない部分でも協力いただいている。いちいの会でもチラシを作って会員を募集しているが、美術館に来ないとそのチラシも目につかないこともある。ホームページでもお知らせしているが、なかなか広く知られていない。現在119名の会員がいて、曜日ごとに活動をしていただいている。

委員： ボランタリーな活動に支えられることは、効果的な部分もある。一方、多くの美術館や博物館は、売店、喫茶などは館が直接業者を指定するなど、方針にもう少しかわることが重要になってきている時代だと思う。具体的な事例として紹介すると、写真展の時に、資料として売られていた本を購入した際、1万円以上だったが現金のみの取扱であった。美術館のチケットは電子マネーやクレジットカードが使えるが、売店は現金のみと言われ、そのあたりのコントロールは、なかなかボランタリーな方だと難しいだろう。今後、関わり方や、

やっただけ内容をもう少し効果的に考えるといいと思った。

委員： 様々な意見が出たので、それらを踏まえて改善していただければと思う。本来の意味でコロナが開け、様々なものが通常開催されたのが令和5年度からであるので、これからいろんなことにチャレンジして欲しいと思う。きっかけは様々だが、幅を広げるという意味で少しでも多くの方に美術館に足を運んでいただけるような取組ができればいいと思う。後方からも、側面からも協力していきたいと思うので、引き続き頑張ってください。

委員： いろいろ工夫して取り組まれているなど毎回思っている。コロナ自体はなくなっていないが、今後に向けた取組を進めている最中だと思う。山本二三展の時には、普段足を運ばない方からも展覧会に行ったとの声を多く聞き、駐車場も行列ができており、足を向けていただいて良かった。文化芸術が一部の人の特別な贅沢品ではなく、人らしく生きていくために大事な物ということが普及すると思うので、様々な発信をして函館の文化活動が継続されたらいいと思っている。

委員： キャンパスパートナーシップ制度について、今、私立大学は学生集めに大変な思いをしている。こうした制度を実施していることは学生を集めるためにはいいことだと思うので、各学校の予算を立てる前の時期に、私立学校に働きかけることが有効だと思う。

委員： キャンパスパートナーシップ制度は、公立大学でも実施しており、主に美術系の学部がある大学は、連携を結んで年間誰でも何回でも行けるということで使っているが、そういう学部を抱えていないと、なかなか厳しい。例えば、パートナーになれば、講堂などを年に2回使えるとか、美術館の負担がない範囲で、大学の発表の場所として貸すなど、補填として加えていただくことができれば、美術関係の学部を持っていなくても、パートナー制度を考える余地があると思った。